

博士論文（要約）

論文題目 武家政権下における鎌倉・京の顕密寺社と両仏教界の関係についての基礎的考察
一勝長寿院・鶴岡八幡宮寺・醍醐寺を事例に一

氏名 小池 勝也

目次

序章 本稿の視角と課題

第一節 本稿の視角

(一) 武家政権下における顕密寺社研究

二頁

(二) 中世醍醐寺研究

五頁

(三) 東西顕密仏教界の関係についての研究

八頁

第二節 本稿の構成

一〇頁

第一部 鎌倉顕密寺社と武家政権

第一章 『吾妻鏡』以後の鎌倉勝長寿院と東国武家政権

・ 摂家・宮將軍子弟僧の位置づけ・

はじめに

二二頁

第一節 鎌倉後期（『吾妻鏡』以後）

・ 將軍子息による別当歴任についての一考察・

二四頁

（一） 鎌倉後期の勝長寿院の概要

二四頁

（二） 勝長寿院別当と得宗専制期の宗教政策

二九頁

（三） 勝長寿院と鎌倉將軍

三三頁

第二節	南北朝・室町期	鎌倉府政権下での位置づけ	三七頁
-----	---------	--------------	-----

(一)	南北朝動乱期	三七頁
-----	--------	-----

(二)	鎌倉府政権前期（足利氏満期）	四〇頁
-----	----------------	-----

(三)	鎌倉府政権後期（足利満兼・持氏期）	四二頁
-----	-------------------	-----

おわりに	五四頁
------	-----

第二章 室町期日光山（勝長寿院）別当考

はじめに	六四頁
------	-----

第一節	聖守・聖如	六五頁
-----	-------	-----

第二節	満守・持玄・応永二十五年下向の別当をめぐる	七一頁
-----	-----------------------	-----

第三節	日光山別当職の廃絶と東国の戦乱	八八頁
-----	-----------------	-----

おわりに		一〇二頁
------	--	------

第三章 『輪王寺文書』における「上様」の語義について

はじめに		一一一頁
------	--	------

第一節	「権少僧都昌勝書状」の検討	一一三頁
-----	---------------	------

第二節	「桜本坊宗運書状」の検討	一一六頁
-----	--------------	------

第三節	日光山別当が「上様」と呼称された背景	一二一頁
-----	--------------------	------

まとめにかえて	日光山（勝長寿院）別当の位置づけ	一二五頁
---------	------------------	------

第四章 室町期鶴岡八幡宮寺における別当と供僧

はじめに

一三一頁

第一節 供僧職をめぐる別当と供僧の対立

一三五頁

(一) 二十五坊供僧職の変遷

一三五頁

(二) 供僧職の代替と供僧の反発

一三九頁

(三) 応永七年相論

一四六頁

第二節 二十五坊への院号授与と上杉禅秀の乱

一五六頁

(一) 二十五坊への院号授与

一五六頁

(二) 上杉禅秀の乱と鶴岡別当

一六二頁

第三節 足利持氏と鶴岡別当

一六四頁

(一) 公方御判をめぐる二度目の相論 一六五頁

(二) 別当尊仲の登場 一七三頁

(三) 『鶴岡八幡宮寺社務職次第』の性格 一七七頁

おわりに 一七九頁

第五章 室町期鶴岡八幡宮寺僧組織の基礎的考察

― 若宮別当と二十五坊供僧を中心に ―

はじめに 一九四頁

第一節 室町期鶴岡八幡宮寺別当 一九六頁

(一) 別当の宗派と出自 一九六頁

(二)	鶴岡別当と京都	二〇三頁
-----	---------	------

第二節	室町期の二十五坊供僧について	二〇七頁
-----	----------------	------

(一)	別当による供僧改易の実態	二〇八頁
-----	--------------	------

(二)	外方供僧と進止供僧の関係	二一四頁
-----	--------------	------

(三)	鶴岡寺僧の受法	二一八頁
-----	---------	------

(四)	鶴岡若宮・本宮と別当・供僧の関係	二二二頁
-----	------------------	------

おわりに		二二六頁
------	--	------

第二部 醍醐寺諸院家の展開

第六章 南北朝末期の醍醐寺三宝院院主と理性院院主について

― 宗助の醍醐寺座主就任の背景 ―

はじめに

二三五頁

第一節 醍醐寺座主職と醍醐寺諸院家の関係

二三七頁

第二節 理性院宗助の立場

二四七頁

第三節 光助・定忠期の位置づけ

二五八頁

おわりに

二六二頁

第七章 鎌倉末期から南北朝期にかけての聖尊法親王の動向

― 三宝院流定済方の分裂とその影響 ―

はじめに

二七二頁

第一節 三宝院流の分裂―聖尊の置かれた立場― 二七六頁

(一) 遍智院相論の展開過程 二七六頁

(二) 聖尊の法脈 二七九頁

第二節 聖尊と賢俊の關係―賢助の後継の座をめぐって― 二八九頁

(一) 三宝院賢俊の動向 二八九頁

(二) 建武政権崩壊による立場の逆転 二九七頁

(三) 貞和四年の和与 三〇一頁

第三節 遍智院相論の歸結と後代への影響

・三宝院光助の法脈的位置づけ 三〇四頁

(一) 相論の結末 三〇四頁

(二) 光済の思惑 三一〇頁

(三) 日野流三宝院院主の終焉 光済の誤算 三一四頁

おわりに 三一七頁

第八章 中世における醍醐寺理性院流の展開と太元法

はじめに 三二九頁

第一節 鎌倉期の理性院流の展開 三三八頁

(一) 平安末期～鎌倉中期（太元別当職喪失まで） 三三八頁

(二) 鎌倉後期 三四三頁

第二節 転換期としての宗助期 三五〇頁

(一) 理性院流の再分裂 三五一頁

(二) 理性院宗助と太元法 三六九頁

第三節 中世後期の理性院院主

、寺務代としての活動と太元法の勤仕、 三七一頁

(一) 寺務代としての役割・活動 三七二頁

(二) 中絶する後七日御修法と存続する太元法 三七八頁

おわりに 三八一頁

第三部 東西顕密仏教界の関係性

第九章 南北朝・室町期における東国醍醐寺領と

鎌倉顕密仏教界の展開

はじめに

三九九頁

第一節 各寺社の展開

四〇一頁

(一) 頼朝法華堂

四〇三頁

(二) 五大堂明王院

四一〇頁

(三) 二階堂永福寺

四一三頁

(四) 小括

四二〇頁

第二節 南北朝・室町期における東国顕密仏教界の変遷

四二〇頁

(一) 醍醐寺僧にとっての東国

四二〇頁

(二) 鎌倉顕密仏教界の変質

四二五頁

(三) 鶴岡八幡宮寺の「権威化」

四三〇頁

おわりに

四三二頁

一〇章 東国寺社別当職をめぐる僧俗の都鄙関係

・伊豆密厳院別当職問題を事例に・

はじめに

四四二頁

(一) 室町期政治史上における伊豆密厳院別当職問題の位置づけ 四四二頁

(二) 密厳院別当職問題の宗教史的位置づけ 四四五頁

第一節 貞治年間における密厳院別当職の補任と

東西武家政権の関係 四四八頁

(一) 貞治年間以前の密厳院別当職の推移 四四八頁

(二) 三宝院院主補任への補任 四五一頁

(三) 鎌倉府側の対応 四五五頁

(四) 密厳院別当職問題にみる

貞治年間における室町幕府と鎌倉府の関係 四五七頁

第二節 応永年間の密厳院別当職問題にみる

鎌倉府政権の変化 四五九頁

(一) 足利満兼政権期の対応 四六〇頁

(二) 足利義持による鶴岡別当への密厳院別当職安堵について 四六五頁

(三) 密厳院別当職問題の終焉 四七四頁

第三節	醍醐寺僧にとっての東国寺社別当職	四七九頁
-----	------------------	------

(一)	密厳院別当職をめぐる三宝院と報恩院の関係	四七九頁
-----	----------------------	------

(二)	密厳院別当職に対する	
-----	------------	--

三宝院院主・報恩院院主の認識の相違	四八五頁
-------------------	------

おわりに	四九二頁
------	------

終章 本稿のまとめと今後の課題

第一節	本稿のまとめ	五〇六頁
-----	--------	------

第二節	本稿における反省と今後の課題	五一一頁
-----	----------------	------

本文

出版契約により全文公表不可

書誌事項

著者 小池勝也

書名 『中世顕密寺院の東西・鎌倉後期・戦国の聖俗関係と宗教秩序』

（仮題）

出版社 一般財団法人 名古屋大学出版会

刊行日 二〇二五年九月（予定）

参考文献一覧（著者名五十音順）

・ 赤松俊秀「初期真宗教団の社会的基盤について」（同『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九五七年、初出一九五〇年）

・ 秋山哲雄「都市鎌倉における永福寺の歴史的 성격」（阿部猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会、二〇一〇年）

・ 阿部能久「関東公方と寺院勢力」（同『戦国期関東公方の研究』思文閣出版、二〇〇六年）

・ 新井敦史「室町期日光山の組織と運営」（『古文書研究』四〇、一九九五年）

・同「室町期日光山と自然災害」（『歴史と文化』二二、二〇一三年）

・安藤弥「戦国期宗教勢力論」（中世後期研究会編『室町期・戦国期研究を読みなおす』思文閣出版、二〇〇七年）

・石上英一「西大寺と秋篠寺」（佐藤信編『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会、二〇〇五年）

・石田浩子「醍醐寺地蔵院の関東下向」（『ヒストリア』一九〇、二〇〇四年）

・同「南北朝初期における地蔵院親玄流と武家護持」（『日本史研究』五四三、二〇〇七年）

・同「室町期における「都鄙」間交流」（『人民の歴史学』一八二、二〇〇九年）

・石橋一展「南北朝・室町期の関東護持僧について」（佐藤博信編『中世東国の政治構造』

岩田書院、二〇〇七年）

・同「関東公方の「安堵権」と東国」（『千葉史学』五〇、二〇〇七年）

・同「足利満兼と室町幕府」（黒田基樹編著『足利満兼とその時代』戎光祥出版、二〇一五年）

・石原比伊呂「義詮期における足利將軍家の変質」（『鎌倉遺文研究』二九、二〇一二年）

・市村高男「戦国期の列島と下野」（栃木県立文書館編『戦国期下野の地域権力』、岩田書院、二〇一〇年）。

・伊藤恭子「鶴岡八幡宮別当頼仲と二人の弟子について」（『駒澤史学』五八、二〇〇二年）

・伊藤喜良「鎌倉府覚書」（同『中世国家と東国・奥羽』校倉書房、一九九九年、初出一九七二年）

・井原今朝男「東国莊園年貢の京上システムと国家的保障体制」（『国立歴史民俗博物館研

究報告』一〇八、二〇〇三年)

・同「天皇と仏教」(同『中世国家と天皇・儀礼』校倉書房、二〇一二年、初出二〇〇八年)

・今川佳世子「醍醐寺遍智院をめぐる三宝院賢俊と遍智院宮聖尊の相論について」(『鴨台

史学』四、二〇〇四年)

・植田真平「南北朝・室町期東国史研究の現在」(川岡勉編『中世の西国と東国 権力から

探る地域的特性』(戎光祥出版、二〇一四年)

・植田真平編著『足利持氏』(戎光祥出版、二〇一六年)

・同「公方足利氏満・満兼期鎌倉府の支配体制」(『歴史学研究』九一七、二〇一四年)

・上野進「室町幕府の顕密寺院政策」(『仏教史学研究』四三・一、二〇〇〇年)

・江田郁夫「武力としての日光山」(『日本歴史』六三八、二〇〇一年)

・同「鎌倉公方連枝足利満隆の立場」(同『室町幕府東国支配の研究』高志書院、二〇〇八年、初出二〇〇五年)

・海老名尚「鎌倉の寺院社会における僧官僧位」(福田豊彦編『中世の社会と武力』吉川弘文館、一九九四年)

・同「鎌倉幕府の顕密寺院政策」(『北海道教育大学紀要』人文学・社会科学編、六一・二、二〇一一年)

・大田壮一郎「室町幕府宗教政策論」(同『室町幕府の政治と宗教』塙書房、二〇一四年、初出二〇〇七年)

・同「室町殿の宗教構想と武家祈祷」(同右、初出二〇〇四年)

・同「室町殿と宗教」(同右、初出二〇一二年)

・片山伸「室町幕府の祈祷と醍醐寺三宝院」(『仏教史学研究』三一・二、一九八八年)

・金岡秀友「大元法の成立」(『大倉山論集』二三、一九八八年)

・鎗木紀彦「中世後期の安祥寺流について」(『ヒストリア』二五七、二〇一六年)

・川上淳「鶴岡八幡宮における供僧の役割」(『駒澤史学』二五、一九七八年)

・櫛田良洪「関東に於ける東密の展開」(同『真言密教成立過程の研究』山喜房仏書林、一

九六四年)

・久保賢司「享徳の乱における足利成氏の誤算」(佐藤博信編『中世東国の政治構造』岩田

書院、二〇〇七年)

・黒田俊雄「中世寺社勢力論」(『黒田俊雄著作集第三卷』法蔵館、一九九五年、初出一九

七五年)

・小森正明「寺社造営の経済的基盤と鎌倉府」(同『室町期東国社会と寺社造営』思文閣出版、二〇〇八年)

・近藤祐介「修験道本山派における戦国期的構造の出現」(『史学雑誌』一一九・四、二〇一〇年)

・斎藤夏来「室町期関東公方の公帖発給」(『禅宗文化研究所紀要』二八、二〇〇六年)

・桜井英治『室町人の精神』(講談社、二〇〇一年)

・佐々木馨『『禅密主義』の成立』(同『中世仏教と鎌倉幕府』吉川弘文館、一九九七年、初出一九九五年)

・佐々木守俊「法琳寺大元帥明王彫像の成立」(『密教図像』二〇、二〇〇一年)

・同「理性院の御産御祈と本尊画像」(頼富本宏博士還暦記念論文集刊行会編『マンダラの

諸相と文化』法蔵館、二〇〇五年）

・佐藤亜莉華「三宝院門跡満濟と報恩院隆源」（『史艸』五七、二〇一六年）

・佐藤和彦「一四・一五世紀東国社会と農民闘争」（民衆史研究会編『民衆史の課題と方向』

三一書房、一九七八年）

・佐藤進一『新版古文書学入門』法政大学出版局、一九九七年

・佐藤博信「雪下殿に関する考察」（同『古河公方足利氏の研究』校倉書房、一九八九年、

初出一九八八年）

・同「室町後期の鎌倉・鶴岡八幡宮をめぐる」（同『統中世東国の支配構造』思文閣出版、

一九九六年、初出一九九四年）

・同「妙本寺の成立と展開」（同『中世東国日蓮宗寺院の研究』、東大出版会、二〇〇三年）

- ・同「鎌倉府による寺社支配の一樣態」(千葉大学『人文研究』四五号、二〇一六年)
- ・清水真澄「阿弥陀堂勝長寿院の建立について」(『金沢文庫研究』一八、一九七二年)
- ・下坂守「山門使節制度の成立と展開」(同『中世寺院社会の研究』、思文閣出版、二〇〇一年、初出一九七五年)

・下村周太郎「鎌倉幕府の歴史意識・自己認識と政治社会動向」(『歴史学研究』九二四、二〇一四年)

・住田炭考「太元帥法の研究」(『密教論叢』二二および二三、一九四二年)

・平雅行「鎌倉仏教論」(『岩波講座日本通史』八巻、岩波書店、一九九四年)

・同「定豪と鎌倉幕府」(大阪大学文学部日本史学研究室編『古代中世の社会と国家』、清

文堂出版、一九九八年)

・同「將軍九条頼経時代の鎌倉の山門僧」（藺田香融編『日本仏教の史的展開』塙書房、一九九九年）

・同「鎌倉山門派の成立と展開」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇、二〇〇〇年）

・同「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶」、『待兼山論叢』四三、二〇〇九年）、

・同「鎌倉寺門派の成立と展開」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』四九、二〇〇九年）

・高橋慎一郎「醍醐寺過去帳の分析」（高橋敏子編『東寺における寺院統括組織に関する史料の収集とその総合的研究』、科研報告書、二〇〇五年）

・高橋典幸「武士にとっての天皇」（同『鎌倉幕府軍制と御家人制』（吉川弘文館、二〇〇八年、初出二〇〇二年）

・田口寛「足利持氏の若君と室町軍記」（植田真平編著『足利持氏』戎光祥出版、二〇一六

年、初出二〇〇八年）

・田代脩「中世東国における農民闘争とその基盤」（豊田武博士古希記念『日本中世の政治と文化』吉川弘文館、一九八〇年）

・同「その後の佐々目郷と矢古宇郷」（『埼玉県史研究』五号、一九八〇年）

・橘悠太「南北朝期における醍醐寺三宝院光濟と室町幕府」（『日本史研究』六二六、二〇一四年）

・谷口雄太「足利氏満の妻と子女」（黒田基樹編『足利氏満とその時代』、戎光祥出版、二〇一四年）

・千田孝明「応永・永享期の日光山」（地方史研究協議会編『宗教・民衆・伝統』雄山閣出版、一九九五年）

- ・外岡慎一郎「鎌倉時代鶴岡八幡宮に関する基礎的考察」(『中央史学』三、一九八〇年)
- ・富田正弘「中世東寺の祈祷文書について」(『古文書研究』一一、一九七七年)
- ・同「室町時代における祈祷と公武統一政権」(日本史研究会史料研究部会編『中世日本の歴史像』創元社、一九七八年)

・同「中世東寺の寺院組織と文書接受の構造 付 寺僧一覽・諸職補任・索引」(『資料館紀要』八、一九八〇年)

・中嶋和志「鶴岡八幡宮における供僧の成立と役割」(『法政史学』四五、一九九三年)

・中島丈晴「中世における関東醍醐寺領の基礎的考察」(『ヒストリア』二〇四、二〇〇七年)

・仲田順和「醍醐寺文化財の伝承・保存の心」(永村真編『醍醐寺の歴史と文化財』勉誠出

版、二〇一一年)

・長塚孝「鎌倉御所に関する基礎的考察」(広瀬良弘編『禅と地域社会』、吉川弘文館、二〇〇九年)

〇〇九年)

・同『鎌倉年中行事』と海老名季高」(『鎌倉』一〇八、二〇一〇年)

・永村真「鶴岡八幡宮寺両界壇所の成立と存続の要因」(『神奈川県史研究』五〇、一九八

三年)

・同「醍醐寺報恩院と走湯山密厳院」(『静岡県史研究』六、一九九〇年)

・同「院家」と「法流」(稲垣栄三編『醍醐寺の密教と社会』山喜房仏書林、一九九一年)

・同「門跡」と門跡」(大隅和雄編『中世仏教と社会』吉川弘文館、一九九八年)

・同「修法と聖教」(同『中世寺院史料論』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九八年)

・同「醍醐寺文化財統合システムの機能と課題」（同編『醍醐寺の歴史と文化財』勉誠出版、二〇一一年）

・西尾知己「中世後期寺社勢力の構成と機能」（『歴史評論』七九七、二〇一六年）

・原田正俊「中世後期の国家と仏教」（同『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九七年）

・伴瀬明美「室町期の醍醐寺地蔵院」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二六、二〇一六年）

・藤井雅子「南北朝期における三宝院門跡の確立」（同『中世醍醐寺と真言密教』、勉誠出版、二〇〇八年、初出二〇〇二年）

・同「三宝院・三宝院流と醍醐寺座主」（同右）

・同「室町時代における三宝院門跡の実態」（同右）

・同「後宇多法皇と醍醐寺諸院家との関わり」(同右)

・同「南北朝の動乱と醍醐寺」(永村眞編『醍醐寺の歴史と文化財』、勉誠出版、二〇一一年)

・同「三宝院門跡と門徒」(『日本女子大学紀要 文学部』六五、二〇一五年)

・同「中世における三宝院門跡の確立と存続」(永村眞編『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版、二〇一七年)、

・藤井万喜太「日光山常行堂源頼朝遺骨の検討」(『歴史地理』六八・五、一九三八年)

・細川重男「右近衛大将源惟康」(同『鎌倉北条氏の神話と歴史』日本史史料研究会、二〇

〇七年、初出二〇〇二年)

・細川武稔『京都の寺社と室町幕府』(吉川弘文館、二〇一〇年)

- ・松尾剛次「中世都市鎌倉」(五味文彦編『都市の中世』吉川弘文館、一九九二年)
- ・松岡隆史「室町期における醍醐寺座主の出自考察」(『古文書研究』七七、二〇一四年)
- ・松永昇道「大元法私考」(『密宗学報』二七、二九、一九一五年)
- ・三枝暁子『比叡山と室町幕府』(東京大学出版会、二〇一一年)
- ・峰岸純夫「永仁元年関東大地震と平禅門の乱」(同『中世災害・戦乱の社会史』、吉川弘文館、二〇一一年、初出一九九三年)。

・同「戦国時代足利領の百姓申状」(『栃木県史しおり』中世二、一九七五年)

・村井章介「執権政治の変質」(同『中世国家と在地社会』校倉書房、二〇〇五年、初出一九八四年)

・森茂暁「三宝院賢俊について」(同『中世日本の政治と文化』思文閣出版、二〇〇六年、

初出一九九〇年)

・同「五壇法修法一覽」(同右)

・同『満濟』(ミネルヴァ書房、二〇〇四年)

・同『室町幕府崩壊』(角川出版、二〇一一年)

・山田邦明「室町期における鶴岡八幡宮の所領支配と代官」(同『鎌倉府と関東』校倉書房、一九九五年、初出一九八八年)

・同「享徳の乱と鶴岡八幡宮」(同右、初出一九八九年)

・同「遍照院頼印と鎌倉府」(同『鎌倉府と地域社会』同成社、二〇一四年、初出一九九〇年)

・山田邦明「鎌倉府政権の構造と基盤」(同『鎌倉府と関東』校倉書房、一九九五年)

・山家浩樹「上総守護宇都宮持綱」（江田郁夫編著『下野宇都宮氏』戎光祥出版、二〇一一年、初出一九八九年）

・同「延文四年記」記主考」（東寺文書研究会編『東寺文書と中世の諸相』思文閣出版、二〇一一年）

・湯山学「隆弁とその門流」（同『鶴岡八幡宮の中世的世界』私家版、一九九五年、初出一九八一年）

・同「頼助とその門流」（同右、初出一九八一年）

・同「定豪とその門流」（同右）

・同「山内本郷の証菩提寺と一心院」（同『鎌倉北条氏と鎌倉山ノ内』、私家版、一九九九年、初出一九八三年）

- ・同「続鶴岡八幡宮文書考」(同『中世の鎌倉』、私家版、一九九三年、初出一九八五年)
- ・同「伊豆山(走湯山)文書考」(同『鎌倉府の研究』岩田書院、二〇一一年、初出一九九一年)

・横田光雄「戦国期鶴岡八幡宮の宗教的権威と後北条氏」(同『戦国大名の政治と宗教』國學院大學大学院、一九九九年、初出一九九八年)

- ・同「戦国期鶴岡八幡宮の歴史的伝統と後北条氏」(同右、初出一九九八年)

・芳澤元「鎌倉後期の禅宗と文芸活動の展開」(上横手雅敬編『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版、二〇〇八年)

- ・吉田通子「鎌倉後期の別当頼助について」(『史学』五四―四、一九八五年)

・同「鶴岡八幡宮寺の宗教的特質とその役割について」(『日本仏教史学』二一、一九八六

年)

・同「鎌倉永福寺成立の意義」(『地方史研究』三二、六、一九八二年)

・ロベル・デュケンヌ「阿吒婆俱曠野薬叉と大元帥御修法」(『印度仏教学研究』二三、二、

一九七五年)

・渡辺世祐『関東中心足利時代の研究』新人物往来社、一九七一年、初出一九二六年)

論文の内容の要旨

本論文では、日本中世武家政権下における鎌倉・京の顕密寺社の組織や、別当職・院主職という寺社の首長の変遷過程に注目しながら、中世仏教の東西それぞれの中心地であった鎌倉・京の仏教界の関係がどのように変化していったのかを検討したものである。

このテーマに取り組むために本稿では、序章「本稿の視角と課題」において、以下のような三つの課題を設定した。

まず第一に、南北朝期以降の鎌倉顕密寺社の検討を行うことである。当該期の東国武家政権たる鎌倉府政権下における寺社研究は、鎌倉幕府・室町幕府政権下におけるそれに比して遅れているのが、現状である。そこで本稿では、鎌倉の勝

長寿院と鶴岡八幡宮寺という東国武家政権下で特に重要視された二つの寺院の鎌倉後期から室町期の展開を検討し、中世後期の鎌倉の顕密仏教界の実態に迫るところを目指した。

第二に、室町幕府と密接な関係を築いた三寶院をはじめとする、醍醐寺の諸院家の動向を検討することである。醍醐寺の諸院家に特に注目する理由は、醍醐寺は数ある畿内顕密寺社の中でも、多くの寺領を東国に有し、東国の寺社別当職も多く兼帯していたからである。さらに、醍醐寺組織内部の問題についても未解明な点が多く存在する。東西の仏教界の実態を把握するための前提作業として、双方に強い影響力を有した醍醐寺の諸院家についての基礎的な事実の解明を目指した。

第三に、東国醍醐寺領を中心に展開された、東国に存在する畿内寺社領、および畿内在住僧が保持する東国寺社別当職をめぐる僧俗の東西対立について検討することである。畿内在住僧が、東国寺社別当職へのこだわりを持ち続けた理由や、寺社別当職相論の頻発が東西の仏教界にどのような影響を与えたのかについては、未解明な点が多い。本稿では、この課題に取り組むことで、東西の仏教界の関係の変化について究明することを目指した。

以上の課題設定のもと、本論は三部一〇章で構成される。

第一部「鎌倉顕密寺社と武家政権」では、鎌倉の勝長寿院・鶴岡八幡宮寺と東国武家政権（鎌倉幕府・鎌倉府）の関係について考察した。

第一章「『吾妻鏡』以後の鎌倉勝長寿院と東国武家政権・摂家・宮將軍子弟僧の

位置づけ」では、鎌倉後期以降の勝長寿院について、別当の動向を軸に検討した。その結果、勝長寿院では、一三世紀末以降鎌倉將軍子弟僧の別当職就任が相次ぎ、別当の貴種性は東国一であったが、一四世紀末以降になると別当の鎌倉不在や、その貴種性ゆえに鎌倉公方から警戒されその力が衰退していくと見通した。

第二章「室町期日光山（勝長寿院）別当考」では、勝長寿院別当が兼帯する下野日光山に伝わる『輪王寺文書』等を用いて、室町期の勝長寿院別当の動向を東国の戦乱と関連づけながら検討した。また第三章『輪王寺文書』における「上様」の語義について」では、中世の『輪王寺文書』中にみえる「上様」という言葉の語義が、先行研究で指摘される「鎌倉公方」ではなく、「勝長寿院（日光山）別当」を指すものであると指摘したうえで、別当が上様と呼ばれた背景を、鎌倉公方子

弟の別当職就任に見出した

第四章「室町期鶴岡八幡宮寺における別当と供僧」および第五章「室町期鶴岡八幡宮寺寺僧組織の基礎的考察・若宮別当と二十五坊供僧を中心に」では、室町期の鶴岡八幡宮寺の展開を、八幡宮寺のトップである若宮別当と、若宮別当とともに寺社経営にあたる二十五坊供僧との関係を軸に、鎌倉府（公方）の存在にも留意しつつ検討を行った。その結果、別当と供僧の関係は緊張感をはらむものであり、東密派の別当が、他門派の供僧のわずかな過失をとがめて改易処分追い込み、東密派の供僧に改めていった結果、鶴岡八幡宮寺が室町期を通じて東密寺院化したこと、さらに鎌倉府（公方）との関係に関しては、鶴岡別当と公方が時に対立関係に陥ることもあり、両者の関係は必ずしも良好とはいえないものであ

ったことを指摘した。

第二部「醍醐寺諸院家の展開」では、南北朝・室町期の醍醐寺三宝院流・理性院流に属する院家の展開過程について検討した。

第六章「南北朝末期の醍醐寺三宝院院主と理性院院主について」宗助の醍醐寺座主就任の背景」では、研究が進んでいなかった南北朝末期における醍醐寺の歴史的展開について、至徳二年（一三八五）の理性院宗助の醍醐寺座主就任問題を軸に検討した。その結果、理性院宗助は三宝院院主の側近として活動し、その立場を利用して理性院院主初の醍醐寺座主就任を果たしたことが、南北朝末期の三宝院院主光助・定忠期は三宝院院主の力が非常に衰えていた時代であったことを指摘した。

第七章「鎌倉末期から南北朝期にかけての聖尊法親王の動向・三宝院流定済方の分裂とその影響」では後二条天皇皇子で醍醐寺遍智院の院主であった聖尊法親王という人物の動向に焦点をあて、聖尊の存在が中世醍醐寺の歴史にどのような位置づけられるかを検討した。その結果、聖尊は三宝院流道教方・同定済方という競合する二門派双方と深い関係にあったこと、聖尊が南北朝期に三宝院賢助の遺跡をめぐって三宝院賢俊と対立を起こし、この対立が、南北朝末期の一時的な三宝院衰退の遠因となったことを指摘した。

第八章「中世における醍醐寺理性院流の展開と太元法」では、基礎的な検討が不足していた中世の醍醐寺理性院流の展開過程を、理性院流相伝の護国法である太元法の存在に注目しつつ検討した。鎌倉期の理性院流は、平安末期に獲得した

太元法別当職を喪失し、法流も内部分裂を起こすなど低迷していたが、南北朝期に三宝院賢俊の介入によって院主となった宗助は、寺務代として醍醐寺座主である三宝院院主を支えると同時に、太元別当職の理性院流への回復も果たした。以後の理性院院主はこの二つの地位を保持することで存在感を発揮していくことになり、理性院流の歴史の中で宗助期は大きな転換期であったことを指摘した。

第三部「東西顕密仏教界の関係性」では、醍醐寺僧が兼帯した東国寺社の諸職、およびそれに附属する所領に関する相論に注目することで、東西仏教界の関係について考察した。

第九章「南北朝・室町期における東国醍醐寺領と鎌倉顕密仏教界の展開」では、東国の醍醐寺領の南北朝・室町期の展開を概観したうえで、東国醍醐寺領と鎌倉

顕密仏教界の關係について考察した。その結果、醍醐寺の院主達は鎌倉後期から南北朝期にかけて東国で活動を展開し、その中で主要な寺社別当職も獲得しているが、一三六〇年代以降東国での祈祷活動の重要性が低下した結果、彼らの下向はなくなった。しかし、別当職は以後も経済的利権として京にいる醍醐寺僧が保持し続けたため、寺社経営の在り方などをめぐって、東西の仏教界で武家政権を巻き込んだ対立が惹起したこと、また鎌倉の有力顕密寺院の別当が上述の理由から、鎌倉に不在となる中で、一貫して別当が鎌倉にあった鶴岡八幡宮寺の権威が前代以上に高くなってくることを指摘した。

第一〇章「東国寺社別当職をめぐる僧俗の都鄙関係、伊豆密厳院別当職問題を事例に、」では南北朝・室町期に発生した伊豆密厳院別当職をめぐる問題を事例

として、室町幕府と鎌倉府の関係の推移、および三宝院と報恩院という醍醐寺の二つの院家の関係や東国寺領に対する認識の差異などについて検討した。その結果、先行研究では両武家政権の対立を象徴する事例として理解されがちな密厳院別当職問題であるが、両政権は合意形成に向けた折衝も重ねており、むしろ応永二〇年代後半に両者の折衝が見られなくなったことが、関係悪化を象徴するメルクマールであること、醍醐寺側で密厳院別当職を保持していた二つの院家（三宝院、報恩院）の間には、密厳院別当職に対する認識に差があり、報恩院が門流由緒の重職として密厳院別当職を重視したのに対し、三宝院が密厳院別当職を望んだのは、報恩院を牽制する思惑が強かったからにすぎないことを指摘した。

そして終章「本稿のまとめと課題」においては、本稿のまとめおよび今後の課

題を示した。

本稿の検討の結果、醍醐寺僧をはじめとする京の顕密僧の行動変化が、鎌倉の顕密仏教界の展開に大きな影響を与えたことが指摘できる。すなわち、一四世紀後半になって室町幕府・鎌倉府の自立化が進み、また鎌倉府が鎌倉幕府のように京の顕密仏教界に人事介入できるほどの実力を有していなかったこともあり、京の顕密僧は鎌倉を自身の祈祷活動の場とすることはほぼなくなった。しかし、彼らが鎌倉で活動していた時期に獲得していた寺社別当職は、門流相伝の重職として経済的利権も含めて保持され続けた。その結果、寺社や所領の経営をめぐって東西仏教界、武家政権の対立が惹起していく中で、在鎌倉の顕密僧達は、京の顕密僧の影響力を排除しつつ、鶴岡八幡宮寺別当を中核とする新たな宗教体制の構

築を試みるのである。

以上の試論は、一部の顕密寺社の検討のみから導き出されたものであり、検証が不十分な点も多い。今後は、禅律寺院や神社などにも検討の幅を広げつつ、東西仏教界それぞれの展開を関連づけながら、より包括的に検討していくことが課題となる。